



時局資料第二十輯

聖戰の意義

内閣情報部

一、本書は時局認識の爲めの参考資料として編纂したものである。

二、本書の内容はなるべく広く、且つ有効に活用され一般の時局認識徹底に資することを希望する。

昭和十五年四月二十日

目次

一、はしがき	一
二、支那事變の意義	一
三、興亞の大業と肇國精神	二
四、今次事變の本質	九
五、興亞大業と神武天皇の御創業	一三
六、皇軍の本質	一五
七、經濟合作の眞意	一六
八、現地日本人の責務	一七
九、聖戰貫徹とわが國力	一八
一〇、結語	二〇

聖戦の意義

一、はしがき

支那事變は既に三年になるにも拘らず、聖戦の意義が未だに國民に徹底してゐないとは何事であらう。今次事變は正に國家總力戦でなくてはならない。支那新中央政府が樹立せられ事變は一段階を劃するとはいへば、實質的に見れば依然事變は繼續するものであつて、前途四圍の情勢は益々わが國家國民の堅忍持久を固める必要がある。この際茲に聖戦の意義に就いて有らゆる角度から検討して記述しその理解を求めんと努めた次第である。

二、支那事變の意義

支那事變の目的は抗日容共政權の膺懲戦であり日、滿、支を樞軸とする東亞民族の善隣友好、共同防共、經濟提携即ち東亞新秩序の建設を目的とする戦ひであつて領土や賠償を求めんとするものでないことは政府の屢々天下に聲明せる所である。

今次事變の由つて來るところを省みるに帝國は膺懲の師を進むる一方、國民政府の覺醒を促したるが遂に彼はわが眞意を解せざるのみならず、却つて愈々聯蘇容共の態度を露骨にし更に英米その他列強の干渉乃至援助を頼んで長期抗戰の策に出でてゐるため帝國は國民政府が瀟意改替せざる限り之を對手とせず、眞に提携するに足る新興支那政權の成立發展を期待し是と兩國國交を調整して、更生新支那の建設に協力するの國策を決定したのである。

わが帝國の支那事變處理の態度は以上の國策から次の様に決定してゐる。即ち戰勝者として賠償を要求せず、領土を欲せず、支那の主權を尊重し經濟は互恵平等の原則に依つて我獨り獨占せず、又第三國の權益は第三國が東亞の新事態に即して平和的活動を行ふものである限り之を尊重するのみならず、更に進んで支那の近代國家建設に對し積極的に協力するといふ俯仰天地に恥ぢざる方策を以て支那に臨んでゐる。是を聖戰と云ふ。わが帝國が侵略的戰爭から全く脱却したる新たな戰爭態度、事變處理方策を敢行せんとする所以のものは一にわが肇國の精神に立脚し東亞の將來を大局的に大乗的に達觀し、東亞の新秩序建設を念願したるがためである。

三、興亞の大業と肇國精神

「凡そ亞細亞に於て正理に反するものが二つあると考へられる。一つは白人強國が亞細亞に加へつゝある侵略である。他の一つは亞細亞自身の中に潛む蒙昧である。この二つは因果の關係を相互助長し合つてゐる。ために外に對しては奴隸的狀態に陥り、内に於ては混亂と窮乏とが絶えない。これが亞細亞の『今日』である。二つとも除かれねばならない。除かれたる所から亞細亞の明日が生れる」これは中華民國維新政府一要人が「亞細亞の明日を語る」と云ふ小冊子に書いた自序の一節である。蓋し、亞細亞の現實を明快に表現してゐるものと思ふ。亞細亞の過去が白人種の壓迫と搾取に蹂躪せられた侵略の歴史であり、又亞細亞自身に内在する蒙昧が亞細亞の過去を無秩序と混亂に陥れ兩者相錯綜して東洋の歴史をして白人種支配の歪曲された歴史にしてつた。かくて過去の亞細亞の秩序は歐米列強支配の下に於ける隷屬的秩序に過ぎず、政治的には勿論思想的にも經濟的にも東亞自體の自主性は全く失はれてつた。その自らの秩序を規定する樞軸を失つたのである。然し斯る歪曲された秩序も永久に保持される事は不可能である。先きに起れる日露戰役滿洲事變は實に日本が生きんとする本能の自衛的發動ではあつたが今日より考ふれば自衛的秩序を持たざる東亞に東亞自身の新秩序を建設し歐米の侵略を排除した革新的建設の發端であつた。今次の支那事變が武力戦のみを以て終局を告ぐるものに非ずして愈々長期建設に發展せる事はかゝる歐米の實利主義功利主義の侵略により形成された舊秩序を完全に擊破して亞細亞自身の新秩序を建設し道義世界を實現せんとするものに他ならないからである。

かゝる觀點より見れば支那事變の本質は世界の政治體制に觸れた世界秩序の問題であることを我々はこ

ここに判然と認識し得るのである。

さてこの興亜の大業は、もと／＼歴史的に見ても、人種的に見ても、將又經濟的に見ても相倚り相助けて進むべき運命にあつたアジア民族六億の大理想であるのみならず實にわが肇國の大理想であることを深く認識しなければならぬ。肇國の大理想は天照大御神の神勅、三種の神器、神武天皇の聖勅を審に拜すればその大綱を把握することが出来る。

天照大御神の神勅を拜察するに「實神ノ隆ニマサニコト、常ニ天壤ト窮リナカルヘシ」といふ大御言がある。之はその字義からいへば皇位が無窮に隆えると言ふことであるが、その意義は、皇室を中心に奉じわが國が生成發展することである。これは單なる觀念を申されたものではない。實に神勅の御趣旨の如く積極的で、國家が益々發展して行き得る様にわが皇祖皇宗が大八州の地理的位置と民族性とを御創造あそばされたのであつて、それは確に日本民族の大理想を御表現遊ばされたものと拜するのである。即ち大八洲を足場として西はアジア大陸に東は太平洋上に一大家族的發展を遂げるべき運命を授けられてゐる。この意味から見て日本の國家創造が今もなほ續けられつゝあるのである。さて茲に云ふ生成發展の肇國精神と所謂帝國主義なる思想との差異に就て吾人は判然たる辨別力を有しなければならぬ。即ちわが生成發展なるものは徳治の生成發展の意に外ならない。換言すれば道の國、皇道國家の完成に向ふ生成發展である。而してこの事たるや、積極的に、世界に道を布き、世界を徳化し、世界の文化を向上することを意

味する。即ち神勅の徳治の御精神、神武天皇の「八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ム」皇孫ノ正ヲ養ヒタマヒシ心ヲ弘メム」等の聖詔に表現せられてゐる人類愛、正義等の精神を廣く世界に及ぼし、以て道義世界の完成に向ふと云ふのが生成發展の肇國精神であらねばならぬ。

故に帝國主義なるものが、人類の共存共榮を無視し、國家利己主義に基づく經濟慾、領土擴張慾等の無限の利益追求を意味するならば、それはわが肇國精神とは全く相容れないものである。今日外國より宣傳されてゐる平和とか帝國主義反對とかいふやうな美辭麗句も、その真相は強大國の現状確保や、世界赤化の如き國家的利己主義の手段以外、とれだけの良心を以て叫ばれてゐるのか頗る疑問である。故に我々は、外國よりの爲にする宣傳に迷はざることなく、肇國精神に就ての鞏固なる信念の下に、よく國家の實力を充實し、以て生成發展國是を實現し、世界の非道を一掃することに邁進すべき大使命を有する。

かくの如くわが肇國精神即ち國家統治の根本の御精神が、進歩的であるといふことは、生成發展の民族性から来る必然的結果であつて、進歩性は必然的に智を尙ぶ。蓋し智を重んぜざる所に進歩はあり得ないからである。智は又情意に正しき進路を與へて、之を眞の仁愛、眞の武勇たらしめる。眞智の光が蔽はれた情や意は、盲愛となり、蠻勇となり勝である。要するに智を尙ぶことは進歩の原動力として將又仁恕武勇の指針として國家統治上不可缺の要素である。されば智を尙ぶことは肇國以來大に重んぜられた。神武天皇は東遷の大御言に「皇祖皇考、乃至神、乃至聖ニシテ、慶ヲ積ミ、暉ヲ重ネテ、多ニ年所ヲ歴タ

六
リ」と仰せられた。暉は太陽の光即ち明徹の智を意味する。又三種の神器を智、仁、勇になぞらへ、その神鏡は智の表徴なりとする説が行はれてゐるのは、わが國家統治の根本原理中に尙智の精神があり、且之が實現せられてゐたことの反映であらう。而して又古來わが民族が外來の文化文明を吸収同化して、今日の如き國家の隆昌を招來せることは、何よりも雄辯に尙智の精神を物語るものといはねばならぬ。

従つて排他的獨善的ではなく極めて大きい包容力を持つてゐる。即ち日本の文化なるものは東西兩文化を融合し眞正の世界文化を創造すべき大使命を有するものである。

次には仁恕と平和と云ふことである。由來わが民族性は頗る情に厚い。この情に厚い民族性は、家族的の國家組織と相俟つて、上にあつては仁恕そのものの御統治となり、下にあつては忠愛の情として發現された。わが民族の傳統的特性とわが國家組織の特殊形態とから悠久の間に練成せられた民族精神と、皇祖皇宗の歴代相傳へ給ふ御遺訓に基調を有する仁恕の御統治は、獨り本來の大和民族に對してのみならず、異民族に對しても、一視同仁隔てなく光被せられたのである。

「國のためあなたす仇はくたくともいつくしむべき事な忘れそ」の 明治天皇御製を拜誦し奉れば又何をか述ぶる必要があらう。

次には正義武勇の氣魂が嚴然として存在してゐることである。わが肇國精神の仁恕、平和は、盲愛ではなく、屈辱叩頭的の平和では斷じてない。又諸外國に見るが如き、單なる筆舌上の空理空論ではなく、何處までも言擧げせぬ斷行である。正義に立脚する平和が攪亂せられ已むを得ずと見るや、わが國は大敵に對しても、劍を抜いて斷乎として立つのである。要するにわが肇國精神は、決して事勿れ主義、事大主義、叩頭主義のような消極退嬰、亡國のものではないことを牢記する必要がある。神武天皇の大詔に「下ハ即チ皇孫ノ正ヲ養ヒタマヒ心ヲ弘メム」と宣はせられたことは、實に正義はわが肇國精神であることを立證するものであり、又皇位及び國家統治の御精神を表徴する三種の神器中に神劍を含むのは、武勇も亦わが肇國の精神であることを示し、神武天皇の御事蹟が頗る武勇に富ませ給ふことはこの肇國精神の發現せるものである。かくの如く正義武勇は、わが肇國の精神であるが故に、太古以降に於ける國內異民族の討伐や外征の目的は、總てこれ我にまつろはずして邪道に生ける人々を皇道に導くための已むを得ざる手段であり、わが國の存立を脅かしその正常なる國運の進展を阻害せるものに對する正當防衛のためであり、又は國際正義を確立し、國際信義を遂行するためであつた。之を一言にしていへば正義の劍に外ならなかつたのである。

日本民族は斷じて戦ひを好むものではない。戦の目的はまつろはぬ者をまつろはすにあるのである。まつろふとは祭り合ふと云ふ義で同一の神即ち同一の理想を奉ずることである。肇國以來一貫せる民族の使命たる八紘をもつて一字即ち一家族たらしめんとする至高、至大、至純なる大理想の實現のため、この理想

を妨害し、この理想を奉せずして刃向ひ來るものに對しては先づ教へ導きて、尙ほ誤ちを改めざるに至つては天遂に怒り、天皇一度草薙の御劍をとりて立ち給へば臣民直ちに一つの心になつて聖戰に身心を捧げ奉るのである。われ^レが考へねばならぬことは、わが民族の戰爭目的は前述の如く相手をして反省せしめ、わが正しき理想を共に奉ずるに至らしめんとする一大民心把握戰であつて、敵に對して決して征服、侵略者の態度をとらないことである。古典に依ればわれ等の祖先はその敵を呼ぶに神を以てした。或はまつろはぬ神といひ、或はあらぶる神といひ、或は螢火のかがやく神と呼びその敵の大小強弱によつてその名を異にしたが何れも之れを神と認めた。即ち神たる本質を有する人間としてその人格の神聖と尊嚴とを認めないのである。凡そ他國に於て我等の祖先の如く其の敵の人格を認めた民族が他にあるか。多くの國に於ては嘗にその敵を神と認めないどころか人間以下の畜生として之を卑しめ憎むのが常である。

われ等の祖先は如何なる敵でも一度我にまつろひさへすれば皆我等の同胞として迎へて至高の理想を實現するために協力せしめたのである。事變下支那人にして我國に居住するもの實に十萬の多きに達するこの一事は何よりも雄辯にわが國心を實證してゐる。

以上述べた肇國精神の内容は、わが國家の統治原理——之を國家そのものの立場より見れば行動原理——とも申すべきものである。この肇國精神は畢竟大和民族の民族性並びにその理想が國家の統治、國家の行動上に顯現せるものであり、その内容は大綱的にして頗る包容性に富み、時勢の變遷に伴ひ轉々變化する

が如き枝葉のものではなく、わが國に於ける道德、宗教、法律、政治經濟その他の諸思想の基調、總ての社會的意識の源泉をなすものである。

わが國の歴史、傳統を見るに、恵まれたる民族性と環境との然らしむる所により、わが民族は肇國以來現國土に安住し、歐洲諸民族の如く逐ひつ逐はれつとして轉々漂浪の生活を営みたることなく、他種族との間にも諸外國の如き征服、被征服の事實がない。従つてわが國に於ては民族本然の社會が極めて自然的に、而も順調に發達して今日に及んでゐるのである。されば古代の社會的意識も既に述べた如く、極めて善美なものであり、この善美な社會的意識が源泉となり、傳統となつて、萬邦無比の國體が形づくられたのである。而して古來わが國に於ては、この善美な肇國精神がよりよく發揚顯現せられた場合、換言すれば國體がその本質をよりよく發揮した場合には、國力は充實し國民はより多き福祉の生活を営み得たのである。之に反してこの肇國精神が蔽はれ、一部の特權階級が勢力を振ひ、肇國精神に背反せる行動を爲したる場合には、國力は衰へ國民の福祉が傷はれたのである。而してこの歴史上の大事實は、勿論現代未來永劫わが國民の思想行動を律する根本規範であらねばならぬ。

四、今次事變の本質

わが國民の日常生活には「向ふ三軒兩隣り」と云ふ極めて卑近にしてわが國ごころを現はした俗語がある。

つまり之は一家の運命協同體の思想であつてわが國が東亞に於て滿洲と親しみ支那と親しまんとする國是も之亦わが國ごころに發したものでなくてなんであらう。この向ふ三軒兩隣の親しみによつて互に長短相補ひ有無相通し共存共榮の實を擧げ得ることとなる。今之を具體問題として民族生存のために必要なる天然資源の配在より見ても分る様に東亞の諸民族はアジア大陸にある資源と太平洋の包含する資源との開拓によつて始めて繁榮を期し得る如く地利的配在が定められてゐる。今や日本は東亞の先進國としてその開拓の使命の發端を起したのであるがこれは東亞全民族の協力によつて始めて完成せられることである。然るに亞細亞の諸國は第十六世紀以後特に第十八世紀以後歐洲勢力の東漸に伴ひその侵略主義の犠牲となつて殆んどその自由は奪はれ、彼等の羈束の下に僅かに餘喘を保つに過ぎない。適、日露戦争が勃發して極東の孤島日本が一躍西歐人を相手として戦ひ勝ち東亞民族のために萬丈の氣焰を吐き東亞開放戦の第一頁を作つた。支那も亦わが奮闘振りに鑑みる所あつて一時日支提携の氣運は高調に達せんとするたこともあつたが、その後南京政府成立以來善隣友好の高義を忘れ専ら歐米唯物主義思想に心酔して之に追隨し東洋本來の精神を没却し遂に東亞を二分せんとするの迷想に陥つてしまつたのである。歐米又之に拍車を加へるのに餘念がなかつた。東亞の民族として支那をして如何にもして傳統的半植民地状態から脱却せしめんと努力したるわが友誼も支那近代の爲政者の近視眼的政策、外交、教育等のため却つて抗日、排日、侮日行爲を以て報いられ、日支の關係は事毎に相剋摩擦の姿となつて現はれ茲に滿洲事變が勃發し

之が延いて今次の支那事變となつたのである。茲に新しき戦争指導の理念が生れ出た。それはわが肇國の精神に基づくものである。即ち搾取を目的とする列強の世界政策を排し共存共榮を目的とする新なる道義的世界政策を儼然たる事實を以て示したものである。

滿洲帝國は複合民族の國家であり、民族協和の實現を以て建國精神の最大眼目となし、日滿一徳一心、民族協和、道義世界の建設を目標として打建てられた。

建國前の滿洲は東洋の火藥庫東亞のバルカン、馬賊の巢窟として知られてゐたものだが建國後僅かに八、九年にして國礎愈々強固に、國運益々隆昌を加へ民族協和し王道樂土を具現し三千萬民衆は太平を謳歌してゐる。試みに滿洲人の個々に就いてわが政策の實現が彼等の人生觀に將又日常の生活に幸福なる變化を齎らざりしや否やを尋ねて見るがよい。

この精神は今回の事變に於ても同一のものである。従つて今次支那事變の目的とする所も決して支那を奪ひ、支那を亡すのが目的ではない。それは實に和せんがために遂に劍を持つて起たざるを得ざるに至つた戦ひである。過去數十年に互り過つての抗日政策をとり來りたる蔣介石政権をして反省せしめんがための戦ひである。彼は今尙ほ日本を侵略者と誣ひ、焦土抗戦を續け支那民衆を戦禍の苦しみで陥れて顧みない。彼としては敗戦を自覺しつゝも從來の行きがかりを一擲するの勇斷なく執拗に長期抗戦を稱へ、自ら滅亡を求めつゝあるのである。



或はかう云ふ意見が出るかも知れない。理論は解つた。しかし支那事變の犠牲を知つてゐるか。尊き數萬の人柱、百數十億の國帑を費してしかも尙ほ且つ代償を求めぬとは觀念的人道主義者の妄想ではないか、或は又侵略主義者と非難せられるのを恐れてゐるのではないかと。

然り、支那事變の犠牲は餘りにも大きい。故にこの犠牲を意義あらしめるべく帝國の支那に求めるものは領土や賠償以上更に大きいのである。即ち日本は支那に對して東亞新秩序建設の一翼としての任務を分擔せんことを要求してゐる。善隣友好、共同防共、經濟提携の三大原則である。善隣友好を實現するためには支那としては滿洲國を承認し、政治、外交、教育、宣傳、交易等諸般に互つて好誼を破壊する様な施設や原因を撤廢し將來に互つても之を禁絶せなければならぬし、又提携を基調とする外交を行ひ、文化の融合及び發展に協力することを必要とする。共同防共のためには、共産分子の組織を掃滅することが必要である。經濟提携のためには、資源就中國防上必要なる埋藏資源に就いて共同防共經濟合作の見地から日支協力して開發し日本に特別の便宜を與へることを要し、交易に就いても便宜を與へることを必要とする。その他實行の手段方法はこの三原則から幾多のものが生れ出て來るわけである。従つてこの三原則の實行によつてわが國としては東亞の防衛力を現實に強化し、日本國民の大陸發展の基礎を確立し得ることとなる。これは今次事變の犠牲を償ふて餘りあるものである。領土や賠償の要求は戰勝者たるわれに一時の満足を與へても日支兩民族をして永遠に舊怨解け難き仇敵の間柄たらしめる。支那民族をして東亞新秩序建

設の一員たらしめるためには彼にも希望と理想とを我と同様に與へなければならぬ。さもなければ日支の提携は永遠に不可能となり、却つて犠牲を無意義たらしめることとなる。

五、興亞大業と神武天皇の御創業

神武天皇御創業の御完成以來茲に二千六百年、光輝ある紀元二千六百年の紀元節を、奇しくも東亞新秩序建設の途次に於て迎へるに至つたことは、一入意義深き覺えるが、此の意義深き佳節に於て、優渥なる御詔書を拜したことは感激の極みである。

朕惟フニ神武天皇惟神ノ大道ニ遵ヒ一系無窮ノ寶祚ヲ繼ギ萬世不易ノ丕基ヲ定メ以テ天業ヲ經綸シタマヘリ歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉ジ君民一體以テ朕ガ世ニ逮ビ茲ニ紀元二千六百年ヲ迎フ

今ヤ非常ノ世局ニ際シ斯ノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思フ神武天皇ノ創業ニ聘セ皇圖ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ助メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スベシ

恭しく詔書を拜するに、改めて我が國體の尊嚴を感ぜざるを得ない。

神武天皇の御創業の皇圖は極めて宏遠であり、皇謨は雄深であつた。天照大神の御神徳を日本書紀には

「光華明彩しくして六合の内に照徹らせり」と申し上げて居るが、神武天皇はこの宏大無邊なる御神徳を具現し宏遠なる肇國の御精神を全うする爲に、實に六年の久しきに互つて數々の艱難辛苦を悉く克服して遂に國內統一の大業を御完成遊ばされ、「六合を兼ねて以て都を開き八紘を掩ひて宇と爲む」といふ雄大な御理想を以て、大和の橿原の宮に即位の禮を擧げさせ給うたのである。爾來二千六百年の春秋が過ぎ二千六百年後の今日、この雄大な御創業に比すべき新東亞建設の大業が、今上陛下の御稜威に依つて着々と進みつゝあるのである。神武天皇の御東征は御東遷——東の方への御發展であり單なる征伐ではないと同様に、支那事變に於てすゝめる膺懲の師も帝國主義的な侵略ではないのである。此の機會に思を遠く二千六百年の昔に馳せ、神武天皇の御偉業を仰ぎ、その大きな意義を明かにして、我等の祖先が仕へまつりしその赤誠を以て今日に御奉公致すのが、今日に生を享けた我等の光榮ある責務である。國體の本義に徹し神武天皇御創業の意義を明かにすれば、仍て以て今次事變の眞意義を明かにし得べきものである。そこで此の詔書を拜した我々は、如何にして聖旨を奉體し舉國一致今日非常の時局に對處すべきであらうか。米内内閣總理大臣は直ちに内閣告諭を發し、「我國民ハニ聖旨ニ恪遵シ一億一心和衷戮力各其ノ業務ニ精勵シ嚴ニ荒怠ヲ戒メ實剛健克ク百艱ヲ排シ萬苦ニ堪ヘ以テ國家興隆ノ成果ヲ舉グルヲ期セザルベカラズ」と述べられてゐる。我々は幾度も詔書を捧讀して、よく聖旨の存する處を體し協力一致奉公の誠を致さねばならない。

肇國の大理想の下に全國民力を合せて戰時意識に徹し、戰時生活を推進し、戰時態勢を強化してこそ、初めて詔書に仰せられてゐる時艱の克服も國威の昂揚も實現され得るのである。

六、皇軍の本質

わが國の軍隊は皇威を發揚し皇道を宣布するを以てその使命とする。わが陸海軍は常に軍人精神の涵養を以て教育訓練の樞軸として軍紀神嚴にして冒すべからざるものあるのを以てわが皇軍傳統の誇りとしてゐる。精銳無比であるわが陸海軍が嚴存する限り皇國の將來は何等不安はない。只この皇軍の十二分の活躍を期し得しむる如く銃後を強化することが必要である。我が將兵が外征に在つてもよく皇軍たるの名譽を保ち敵國人民達に寧ろ自國軍隊よりも畏敬しつゝあることは幾多の戰役が實證しつゝあるところである。皇軍が奥地や島嶼に駐屯するや初めは不慣のため不安を感じたる民衆も暫くにして皇軍の道義的なるを感知し之に信賴しその駐屯の一日も長引かんことを希望してゐる。これは一度現地に活躍せる將兵の齊しく語る處であり又現地に慰問や戰線視察に行つた人も皆痛感する次第である。皇軍は吾れに抵抗する者に對しては斷乎として破邪顯正の劍を振ふが、良民に對しては皇軍の眞義を徹底せしめ之を皇軍に協力せしめる様に諸工作が行はれてゐる。現に北支に十數萬、中支に數萬の支那歸順部隊が活躍してゐる。宣撫工作の如きその主なる一例である。皇軍占據地域の到る處に宣撫班は武器を持たざる戰士として活躍し治安工

作に多大の功績を擧げつゝあるのである。

七、經濟合作の眞意

今日の繁榮を齎したる西歐文化はアジアの人力と資源を基礎として出来上つたものである。若しアジア民族就中支那民族が覺醒してわれと協力してアジアの天然の富源を開發したならば西歐文化に更に優るアジア文化を創造し得るであらう。之によつてわが國も繁榮を來し支那も發展を來し他の民族にもその恩恵に浴せしめ得ることとなる。かゝる見地に立つ經濟合作である。

支那事變處理に伴ふわが經濟方策は以上の主旨がら有無相通する原則に従ひ日滿支の國防確立に資すると共に三國經濟の發展並びに民衆の厚生に遺憾なからしめる方策を決定して著々實行されてゐる。蔣政權、援蔣第三國側は日本は經濟合作の美名の下に經濟侵略擄取を行ひつゝあると宣傳しつゝある矢先にわが軍は占領工場を進んで支那新政府へ返還すべく聲明した。事變以來わが占領地域内に於て正當權利者不在の爲め軍に於て管理し來つた各種工場鑛山など支那側財産はその數二百を超へてゐるが支那派遣軍總司令部では三月十八日新中央政府成立を前にこれ等軍管理工場をすべて支那側正當權利者又は政府に返還すべきことを聲明した。作戰途上に於て支那側財産を返還すると云ふが如きことは他に類例を見ないことで、これ全く聖戰の本義に徹するわが經濟方策眞意の現はれである。かくして新政府が經濟方面に於て企

圖する民族資本の集中動員もこれによつて促進され得ることと思ふ。

八、現地日本人の責務

わが對支處理方策なるものは極めて道義的なるものである。之を不満とする者が國民中にもある位である。かく道義的に決定遂行せられる對支處理方策も之が支那民衆に理解せられ徹底せられ眞の日支提携の實を擧げるのは實に現地にある日本人の聖戰に對する自覺とその實踐にかゝつてゐる。然るに大陸に渡來する人達を見る時支那事變に對する正當の認識を缺くもの意外に多く、新支那建設どころか却つて大業の妨害となつて居る者も尠くない事實に對し吾人は大いに反省するの要があると思ふ。かくては事變の尊き犠牲となつた人々やその家族の人々に對して寔に申譯なきことと謂はなければならぬ。先づ第一今日の支那は吳下の舊阿蒙ではない。近代精神に覺醒した支那であり支那人であることを認識せねばならない。「戰時中」なる言葉に隠れて日本人にして日本人らしからぬ行爲をなしてゐるもの少からざること、遺憾の極みである。かくては如何に政府が大乗的方策を立案し日本朝野が支那との提携を圖つても現地に於ける一つ一つの事實が總てを無價値にならしめることは喋々を要しないことである。現地にある日本人が火事泥的氣分を棄て眞に日支百年の大計のため聖戰參加の銃後の一員たるの自覺を喚び起すことを必要とする。

九、聖戰貫徹とわが國力

支那事變が聖戰たらしめなければならぬことも理解し得たのであるが、然し果して今のわが國力で以てこの大事業を成就し得るや否や甚だ以て疑はしいと批評する輩も世間には少くない。現に敵側を始め援蔣各國は今にもわが國が經濟的に破滅するが如くに宣傳これ努めてゐる實狀であるのである。最近米の出廻り不圓滑や電力制限等のニュースは事實以上に誇大に海外に宣傳せられ、いやが上にも日本に對する觀察を悪からしめ、敵側の士氣を鼓舞しわが第三國外交を不利ならしめてゐることは否定し得ないことである。

勿論帝國としては未曾有の大規模なる戰爭を遂行してゐるのであつて、この影響が國民生活に若干現はれることは今更ら口にするも無駄な話であつて、曩に起れる世界大戰當時參戰列強國民が非常な苦勞を嘗めたことや、今次事變に於けるわが相手方の重慶方面の支那人の現在困苦を嘗めた日常生活に思ひを及ぼして見たならば吾々は出征將士に對する感謝と皇國民たることの幸福とに感謝せざるを得ない次第である。

成る程最近國民經濟部面に現はれたる各種の經濟現象例へば物資不足、動力不足、物價昂騰等の問題は吾等の日常生活に影響を來して居ることは居るが、これを以て直ちにわが國の國力經濟力なるものが對支

戰のため消耗し、愈々窮乏して來たのであると言ひ觸らすものがあつたならば、之は發展日本の眞の姿を知らざる認識不足論で戰時下の日本國民としての心得が足りないものである。

今茲に詳細なる數字を以て示せば一見明瞭となるのであるが近代國家總力戰に於ては外國殊に相手國の戰爭指導を容易ならしめざるため各國共に總動員機密を保持し居る關係上それが出來ないのを甚だ遺憾とするが今之を概括的の數字を以て戰前と今日に於ける鐵鋼、石炭、輕金屬、非鐵金屬、硫安、バルブ、金及工作機械等の重要物資の國內生産額の平均を比較して見ると昭和十年を一〇〇として

昭和十年	一〇〇
〃 十一年	一四〇
〃 十二年	一六五
〃 十三年	二二五
〃 十四年	二八三
〃 十五年	三三三
〃 十六年	三九一

見込とす

右の如く重要物資の國內生産額は加速度的に増加して居るのである。これ等の物資の全部が軍需として使用せられてゐるのではない。その主力は輸出用、生産力擴充用、國民生活用であり、陸海軍需の一部が支



那に於て消耗せられてゐるので軍需の主力は軍備充實に充てられてゐるのである。かく述べれば對支戰の爲消耗せられてゐるものは一小部分であつて他は悉く國力伸展のために使用せられてゐることが理解されよう。

わが國は百萬の大兵を大陸の戦線に送り、その戦争の消耗を補給しある一方に於ては之と併行して生産力擴充計畫つまり國防力自給増大計畫を實行しつゝある。第二年度たる昨十四年度の成果は圖らざる早害のため動力不足を生じ、又歐洲戦争勃發のため資材の輸入に若干の支障を來したのであるが、大體に於て七、八割程度の成績を收め得たのである。これ全く國民が統制經濟による國家への奉公を努めたのに基づく成果である。自給自足國家への國民の努力、之はやがて外國依存の貿易の羈絆から脱し眞に強力日本の建設となり、それが東亞新秩序建設の基礎となるものである。

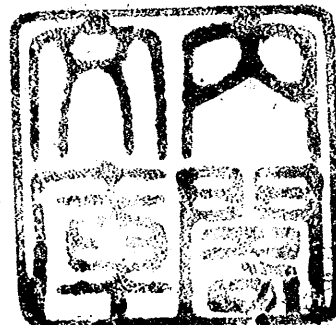
一〇、結 語

わが國が肇國以來未だ曾つて戰つて敗戦を知らぬ所以のものは凡て聖戰であつたからである。われ等の祖父は一旦緩急あれば君のため國のため一身一家を喜んで奉還した。戦死を家門の譽とした。これあるがために如何にわが兵力は少く財力は不足するとも戦ひに勝ち得たのである。

今次支那事變に於ても亦然りである。吾人は如何に蔣介石や援蔣列國がわれを誹謗するとも我が國民が

この聖戰の眞意に徹する限り思想戰に於ても何等恐るゝこともなく最後の必勝を期して待ち得ると信ずる。

日本國中にも極めて一小部分ではあるが聖戰の戰士としての心得なきものや、冒瀆してゐるものが無いではない。吾々は何處迄も聖戰をして聖戰たらしめる様一人々々が省みて努力しなければならぬ。殊に援蔣第三國の態度や歐洲戦争の進展如何によつてはわが國は單に支那事變を遂行するのみならず更に東亞新秩序建設を阻害せんとする列強との摩擦を克服するの時期が到來せぬ限りでもない。吾々は之に備へなければならぬ。その覺悟と準備のためにも聖戰に對して一人の疑義なからしめ國民の不拔の信念を確立する事を急務とする次第である。



(本書の大きさは国定規格A5判)